

廣池千九郎、近代、そして道徳

ピーター・ラフ

「近代」はモラロジーを必要とし、その樹立を可能としたのであるが、本稿は「近代」の性質と歴史を記述することで、そのことを説明する初めての試みである。西洋に起源があり、今日でも本質的には西洋文明の産物と目される「近代」は、その外見の特徴である科学、技術、工業都市化、大衆社会などは西洋の外に輸出できるものの、その精神は永遠に西洋に限定されるものである。

それはなぜなら、「近代」が西洋文明の根幹にあるギリシャ・ローマ思想とキリスト教信仰の裂け目から生じたためであり、それにより、道徳的生活の本質と目的、古典的倫理観とキリスト教的道徳観という、相反しかつ相容れない2つの見解が生み出された。キリスト教がなぜ千年以上もの間これらの異なる見解の調和を試み、なぜアキナスの才能をもってしても失敗の運命をたどったのか、ということの説明理由は多く示されている。もっとも、この過程で西欧の教会が、いわゆる「暗黒時代」を通して古典思想を守ることによって、イタリア・ルネッサンス期の人文主義が近代を打ち立てるのに必要なものを産みだした。

ジェームス・ハンキンスの最近の研究である『徳の政治学』は、人文主義が近代の世俗的な空間をどう切り開いたか、古典的な倫理学が、特にキケロからマキャヴェリに至るまでに、自律性を獲得していく過程を描いている。宗教改革でキリスト教が分裂する中、哲学的倫理学はその独立性を強化したが、統一的な立場を打ち出すことはできなかった。デカルトの合理主義が古典的な理性観念に挑戦した後は特にそうであった。近代は17世紀に成熟し科学革命の成果によって確立したが、哲学的倫理学の内部対立は、それがキリスト教的道徳に代わる効果的な代替物にならなかったことを意味していた。このことを説明するのに、ヒュームとカントを中心とした論争が簡単に紹介されている。

ダーウィンに代表される19世紀の科学的成果をもってしても、こうした状況を改善するには至らなかった。実際に、たとえばトマス・デューイの倫理的思考に見られるような、道徳的信念から道徳的行動へと焦点を移すように奨めることは、かえって状況を悪化させたのである。廣池千九郎が見た近代とは、道徳の本質をめぐる西洋の内戦状態に勝利させ、かつ敗北させた力だったのである。倫理と道徳との間で続いた対立を解消することは、廣池がモラロジーを樹立するうえで避けて通れない、きわめて重要な課題だったのである。

モラロジー、カイチ、決議論、そしてユダヤ法 —法哲学の神性への開放における中庸の探求—

ジェイソン・モーガン

廣池千九郎が展開した「ミドル・ウェイ (middle way, 中庸)」の思想は、孔子の「中庸」やアリストテレスの倫理学に基づいている。この考え方は、例えばアリストテレスの倫理学の中では「二つの極端の間、真ん中の道」として語られているものの、アリストテレスの哲学でも、「中庸」など孔子の哲学でも、「極端を避ける」というよりも、「柔軟に、臨機応変に、あらゆる力や才能を生かして、一人の人間として総合的に正義を求める」という考え方が基本である。そう位置付けると、廣池が語る「ミドル・ウェイ」は、「負」、つまり「極端を避ける」だけではなく、

最も重要な「正」、つまり「正義を求める」要素から築かれていることが明らかになる。

本稿は、廣池の述べる「ミドル・ウェイ」をテーマに設定し、他の法伝統、法文化に見られる「ミドル・ウェイ」と比較して、廣池の「ミドル・ウェイ」の解釈可能性を広げようとするものである。特に、古代中国で裁判の時に使われた「獬豸」（カイチ）という神獣の意義と、およそ400年前の西欧で議論されていた「決議論」、西欧で近現代まで発展してきた宗教論における法哲学、ユダヤ教哲学者や法解釈者が発展させてきたユダヤ法の解釈方法に焦点を当てる。これらと廣池の「ミドル・ウェイ」を対照比較して、「ミドル・ウェイ」を多角的に考察する。

とりわけユダヤ教の法学の中に見える「ハラーハー」と「アッガーダー」の相違とその相違がもつ可能性を重視している。「ハラーハー」と「アッガーダー」は、まさに廣池が孔子やアリストテレスから見出した「ミドル・ウェイ」の理想として理解できる。この「ハラーハー」と「アッガーダー」という対立的法解釈方法を使えば、廣池、孔子、アリストテレスなど他の倫理学者が求めている「正義への道」に進みうると論じる。廣池が描いた「ミドル・ウェイ」を、ユダヤ教の法解釈の中に見られる方法と組み合わせることで優れた「道徳」が見えてくる。

最後に、廣池の法哲学の幅広い適切性を強調し、今後の研究でさらに廣池の法哲学の解釈を応用して世界の法制史を広く深く調査することで、廣池法哲学の可能性を探求することを提起したい。

